
Cocktail

劉悸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C o c k t a i l

【ZPDF】

N1238D

【作者名】

劉悸

【あらすじ】

ある日突然、交通事故に遭った少年。目覚めたとき、彼は記憶を失くしていた。自分は自分なのに、自分ではない。自分は自分であるという証を、ひとつひとつ見つけ出していく。

世界がぐるぐると回っている。

沢山の甲高い悲鳴が聞こえた。

全身に痛みが走ったかと思えば、地面に強く叩きつけられる。

体温が下がっていき、身体が冷たくなっているのを感じた。

生温かい液体が、頬を伝う。

身体を動かそうとしたが、全くといつていいほど動いてくれない。

ああ、死ぬのかな。

まだまだしたいことが沢山あるのに。

こんなに呆氣なく一生を終えてしまつただらうか。

すりつと痛みがひき身体が軽くなつたと同時に、意識も途絶えた。

一話

川辺で、ぼうっとしていた。

考へても考へても片付かなくて、余計に疑問が増えてしまい更に頭を悩ませることになる。

疑問の答えなんて絶対に見付からない。

自分は空っぽだからだ。

何も、持つていなければ。

++ + + + +

目を開けたら、そこは病室だった。

酷く頭痛がするうえ、全身傷だらけで少しでも身体を動かすと鋭い痛みがはしる。

何故こんなところにいるのだろうか。

何故全身に怪我を負っているのだろうか。

それよりも、自分は誰なのだろうか。

疑問ばかりが溢れてくる。

考へても考へても考へても、判らない、不安だらけだ。

数え切れない疑問に胸が押しつぶされ、次には意識なく、叫んでいた。

「樹つ、起きたの？！」

誰かが、室内へ駆け込んできた。

誰だろう、知らない人間がが知らない人間の名前を呼んでいる。

「落ち着いて、ね、大丈夫だから…！」

知らない人間が声をかけながら、抱き締めてきた。

それでも、意思とは関係なく本能のままに叫んでしまう。

それを何とか堪えて、必死に言葉にした。

「あ……んたつ……誰……だよつ……！……！」

その言葉を聞いて、彼女は血相を変えた。

信じられないというようにこちらを見ている。

直後、悲しそうな瞳になり、次は彼女が叫んだのだった。

＋ ＋ ＋ ＋ ＋

あのときの彼女の表情は今も脳内にちらついている。

黒河樹という少年が、数週間前、事故に遭つたらしい。

通学している高校からの帰宅途中、運悪く信号無視をした車にはねられ、病院へ搬送された。

幸いにも大した怪我はなく、数箇所打撲をした程度で済んだ。

だが、それは外傷だけの話。

事故に遭つたショックで今までの記憶が全て消えてしまったのだ。

それが、今の自分だといつ。

自分は数週間前まで普通に高校へ通つていた黒河樹で、今は樹ではない樹。

だがそれは数週間前までの黒河樹といつ者の名前で、決して自分の名前ではない。

それでも自分は樹なのだ。

鏡を見ると、そこには知らない人間の顔が映つていて、それが自分がどういった。

信じられないことだらけだった。

目覚めていきなり全身傷だらけのつえ、記憶喪失をしていると宣告される。

自分は自分なのに、別人だという。

目が覚めて一番に駆け込んできたのは、黒河樹の母親だった。自分の息子が事故に遭い、助かったのに記憶がなく自分のことを忘れてしまっている。

きっと辛いだらうと思つ。

しかし、辛いのは自分だって同じだ。

自分がことが判らない、周囲のことも何ひとつ判らない、不安だらけだ。

「おおっ、そこ」の少年、何だつサボリか？

「…は？」

「んー、悩んでる顔してるな、どーした？」

道を通りかかったのだろう。

気になつたのか寝転んでいる自分の顔を覗きこみ、頬をつんつんと突いてくる。

中学生くらういだらうか。

小柄な体格と低い身長で、ツインテール。

目がくりくりとしていて毛が茶色い女子、そんな印象。

「ちょっとくらうい氣をぬかないと、ストレスで死ぬぞー」

今の自身には、かなり気にさわる言い方だ。

そんなことはつゆ知らず、けらけらとプログラックジョークを言つじぱす。

相手をするのも嫌になる、そう思い知らないふりをした。

「そだ、オレンジジュースは好きですかーつ？」

「…判らない」

「あれ、自分の好みも判らないのか、じゃあ、飲めー！」

「すずいっ」とびつべ。

そう言つて自分で飲むつもりで買ったであろうオレンジジュースのパックを突き出してくる。
見ず知らずの人間に、変わり者だなと思う。
起き上がり、そのパックを一応受け取つた。

「隣座るねーっ」

言う前に座つてゐるじゃないか。

飲むところを見たいのか、興味津々でこちらをじっと見ついている。
仕方なくストローを出し、試しに飲んでみるとした。

「ん…」

「おおっ、ビーよビーよ、美味しい？」

「…美味い」

「おおおおっ、同士…！」

なんて言いながら勝手に手を引つ張り、握手される。

同士とは、オレンジジュース好き同士といつことだらけ。

そんな人間、この世界に何人いるんだか。

「へへっ、あたし加富蒼、君は？」

「黒河…樹…」

「あれ、黒河樹つて、確かこのまえ事故にあつたうちの高校の生徒

？」

同じ高校、それを聞き血の気が引くのを感じた。
前までの黒河樹を知つてゐる人物。

「もう退院したんだ」

「怪我は、大したことなかつたから」

「それでさ…記憶喪失って、本当?」

一度ためてから、そう問うてきた。
びくりと身体が震えたのが判る。

「…何も覚えてないんだ、自分が誰かも判らなくて周り全員が敵に
見えて、何も、何も俺にはない」

そのうえ自分は自分のはずなのに、田覓めたときから黒河樹という
人間の位置づけで、その代わりのような存在でいなければならぬ
無どいろか、マイナスの始まりだ。
どうすれば良いのか、全く判らない。

不安が多すぎて、時々どうしようもなく泣きたくなるし叫びたくな
る。

「…そつか」

「あなたは、黒河樹を知ってるのか?」

「知らないよ、同じ学年らしいけど逢ったこともなかつたし、現に
今判らなかつたじやん」

ずずつと、パックからジュースがそろそろなくなるよと、会図図がな
つた。

いつの間にか全て飲みほしてしまつたらしい。

それを聞いて蒼は嬉しそうに声を出して笑つた。

「何もないって恐いよね、それに今の君の状態だともつと恐いだろ
うなつて思つ」

でもね、と蒼は続け。

「オレンジジュース美味しかったでしょ？」

「あ…ああ

「じゃあ、君の好きなもの一個発見だ、これでゼロじゃないね」

不思議な感覚だった。

こんなことじで、少しでも肩の荷がおりたように感じられるなんて。自分が自分である証明を、見つけた気がする。

「これからで、一個ずつ君の好きなもの見つけっこいのよ」

自分が自分だと言える為の、好きなもの探し。

あたしと一緒にね、と蒼は言った。

独りじゃないと思えたとき、不意に涙が零れそうになつた。

「やつと、たくさんたくさん、出来るよ……」

その笑顔は自分の暗闇に、眩しいくらいの光が、降り注いだよつだつた。

髪を、染めた。

それは勿論、蒼に触発されたからである。

黒河樹の両親にはかなり驚かれた。

何の前ぶれもなく、急にそんな行動に出たのだから当然だろうが。自分自身もこんなことをするなんて蒼に逢うまでは思にもしなかつた。

++ + + + +

「どうか、あんた高校生なんだ、中学生かと思つた」

「しつ、失礼な、ちゃんとした高校生だよ……」

発育が遅いのか、それとももう止まってしまったのか。きっとよく実年齢より年下に見られるタイプなのだろう。

「…どうしたにしろ平日なんだけど、あんたもサボりなの？」

「あー…、お母さんが熱出しちゃってね、あたしがいないとさつと無理するだらうから、看病してるの」

先ほど寝ついたらしく、その間にコンビニへ行って来たとのことだ。母親が好きないちごミルクを買つてこでに、自分の好きなオレンジジュースも買つたらしい。

「それよりもこいつん！…」

「いつつん…？」

「あだ名だよあだ名つ、あたしの」とは蒼で良じからせり

本人の承諾も得ずにあるだ名とこつのは付けられるものなのか、疑問に思った。

きっと蒼は誰に対してもこういつ態度で接しているのだろう。相手が誰だか関係無く同じ態度で接せられるのは、良いことだと思った。

「まずは容姿から改造しよ」ひじやないか！――」

「容姿…？」

「自己表現だよ、服とか髪型とか」

髪型は、いじつていなかつた。

黒河樹が自分の意思で染めたのだろうが、こげ茶色の髪をしている。服装は適当にあつたものを引っ張り出して着てきていた。

「それじゃあたしは帰るけど、また今度逢おうね」

「あ…ああ」

「それまでに好きなものとか出来たら今度教えて」

じやあね、と手を振り蒼は去つていった。

嵐のような感じだ。

突然現れて、たつた少しの間で変化をもたらし、直ぐに去つていく。状況は全く変わっていないのに、自分の心が数分で前を向いている。蒼の背中が見えなくなるまで、その場に立っていた。

++ + + + + +

「好きな、色」

鏡の前で、そう呟く。

蒼にああ言われてからとこつもの、こげ茶色の髪が何だか落ち着か

なくなってしまい、思い切って黒に染めてみた。

黒は、好きだ。

そう思えたのは、深夜に夜空を見たことにある。

静かで落ち着く色だと、思った。

それから青も好きだと思った。

特に群青色が、静かで見ていて落ち着ける。

きっとそんな発見、他人から見れば何でもないことだらう。だが、自身にとつてそれは違う。

好きだと思えるものが見つけられて、どれほど嬉しいか。

自分にも好きだと思えるものが出来るなんて、そんな感情があつたのか。

そう思つたとき、身体が震えた。

ふと、チャイム音が鳴つた。

現在は夕方で、家には自分しかいない。

黒河樹の母親はパートで働いているし、父親も出勤している。

そろそろ母親の方は帰つてくる頃だらう。

黒河樹には兄弟はおらず独りっ子だつた。

出ようか出まいか迷うが、とりあえず出ておこうと玄関まで行き扉を開ける。

「おおっ、いつつんおひさーーー！」

「え…何であんたが…」

言葉に詰まる。

そこにいたのは紛れもなく、蒼だつた。

高校から帰つてきた途中なのか制服を着ている。

それに、蒼の後ろにもう一人、同じ高校の制服を着た男子生徒がいた。

金にブリーチした髪が夕日に反射している。

両耳にピアスを開けているようで、周囲の他人から見たときの第

「印象はきっと不良、だろうと思つ。

蒼の友人だろうか、それにしてはタイプが合つていなによつた。

「先生に御見舞いに行くから住所教えてつて頼んで教えてもらつたんだよ」

「の前と同じテンションで喋る。

まるで生まれたばかりの、小動物だ。

「いつつん髪染めたんだねつ、似合つてゐよ」

「あ…、う…ん」

少し、嬉しかつた。

すぐに気づいてそう言つてくれるのは、の前の自分をちゃんと見ててくれたからだから。

思わず頬が緩んでしまい、蒼がそれを見て楽しそうに笑う。

「あーおー、俺のこと忘れてるだるー」

「うえあつ、千晴、御免つ」

「良いけどやー、俺寂しくて死んじゅつぜー?」

「だから御免ねつて!」

そんな一人のやつとりを見て、思つ。

「…あんたの彼氏?」

「おおつ、そうそう良く判つ…」

「やだなー友達だよ、千晴は友達なの友達、どうからどう見たらうなるのー?」

そこままで言つなんて本当に友達なのだろう。

これからやつという関係に発展するなど、絶対に有り得ないと信じ切つていいようなものだ。

何度も友達、友達と言われ軽いショックを受けたように男は肩を落としている。

「えーとね、同じクラスの相庭千晴、見た目こんなんだけどすつごい良い奴なんだよ」

「見た目こんなってそれ酷くねえ？」

「でも千晴は中身が最高だから良いじゃん」

「…蒼、やっぱ大好きだ」

「冗談はよせーっ」

ああ、漫才コンビか。

間違つた解釈だが、それで納得しておく。

蒼と同じクラスということは、もしかしたら黒河樹と面識があるのかも知れない。

そう思うと、急に胸が締め付けられた。

「つてまあ紹介に『りましたとおり、相庭千晴ね、宜しくいっつん

「…宜しく」

何故千晴が蒼と仲が良いか、判つた気がする。

蒼と似たような性格をしていて、馬が合うのだろう。

二人が楽しそうにしているのを見ていると、哀しくも寂しくも羨ましくもあるような、そんな感覚を覚えた。

「本当はね、もう一人連れてくる予定だつたんだけど、バイトで来れないって言われたんだー」

だから今度紹介するね、と微笑まれる。
取り敢えず自室まで案内した。

黒河樹は整理整頓が苦手だったのか、初めてこの部屋へ来たときは驚いた。

物がそこらじゅうに散乱し、参考書も机上で乱雑に置かれていた。
どうしても落ち着かずすぐに片付けたので、ベットとミニテーブル
しか置いておらず今は見違えるほど綺麗に整頓されている。

「いつつん部屋綺麗だなー」

「つ…」

「ん、ああ、蒼がそう呼んでるのに慣れちゃつたから、俺もいつ呼
ばせてもらひからなー」

漫透してこるのか。

嫌ではないのだが、そう呼ばれるどぞきつて貰ひてしまつ。
何故だかは判らなかつた。

「それじゃあこれから第一回の会議を始めますーーー！」

「か…会議？」

「そーだよー、いつつの為の会議ーーー！」

そつぱつて、通学用鞄から一冊の大学ノートを取り出した。
その表紙にマーカーで字を書き出す。

何を書くかと思い見ていれば。

「じゃーん、こいつんホールト！」

「…俺の？」

「そー、こいつんの好きなものとか嫌いなものとか一個ずつ書いてくの」

「蒼の案なんだぜ、一冊全部埋まつたら、こいつん大百科になるんだつてよ」

好きなものや嫌いなものをひとつずつ書き込んでいく。自分は自分だとこいつ証。

嬉々とし、蒼は早速シャープペンシルを取り出し、ひとつ書き込んだ。

「最初はオレンジジュースだよねえ」

「だな、なあなあ、最近好きになつたものとかある？」

「…黒と、青が好き」

「えええええ、何いきなつ皆白してんだよ…」

「いつつん、あたしのこと好きなの？…」

「そーじゃなくて、色の…」

やはり一人して同じテンションの画なんだ。

こんなところでいきなり告白してびびります。

だよなーと笑う千晴と、蒼は嬉しそうにホールトに書き込む。

「そつか、だから髪を黒くしたんだね」

「…落ち着く、から」

「そーだな、俺も黒好きだぜ」

「だったら千晴も黒くしちゃいなよ、こいつんヒロヒロで

「おお、やーするか…」

この盛り上がりとは何なのだろうか。

人の好きな色だけでこんなに話が弾むものなのだろうか。

「後ねー、好きな食べ物とか出来た?」

「…つ…漬物…浅漬けのが好きだ」

少し言つのを躊躇つた。

漬物、しかも浅漬けが好きだなんてこんなことを言つたら馬鹿にされるかもしれない。

それを聞いてから蒼と千晴はお互い顔を見合せ瞳然としていた。変、なのだろうか。

「あつはつは、いつん渋いねーつ…」

「すつげ、浅漬けが好きだなんて言つのこつさんくらうだろ…」

「…どうせ変だとか言つんだら」

やはり、同じなのだ。

そうやつて否定ばかりする。

どうして自分を見てくれない、認めてくれない。

「違うよ

そう考えたとき、蒼は微笑んで言った。

「変なんてあるわけないじゃん、好きなんでしょう、凄い良いと思つよ

「俺も、こつん惚れたわー、自分で変なんて思つちや駄目だつつの」

「だよねー、個性だもん」

漬物の浅漬けが好き。

今度は蒼に変わつて千晴がそのままノートに書き込んだ。
そして小さく、そんないつつんが好き、と。

「いつつん何かテレビ見る?」

「…見ない、好きじゃないのかもしない」

「おお、なるほど」

そんな他愛のない会話をしながら、ノートに数個の項目が書き込まれた。

きっと自分独りではこんなに自分のことは判らなかつただろう。
それに、何度か感じたものがある。

「うあー、千晴隊員よ、いつの間にやら外は真つ暗ですよ

「…うわ、太陽沈んでるじゃないですか蒼隊長」

「お母さん心配してるだらうな、いつつん、そろそろ帰るね」

「結構ノート埋まつたしな、すげーよ」

「そうだね、いつつんこれ持つてさ何か判つたりしたらどうどん
書いていくと良いよ」

自分がことが沢山判るから。

そう言って、蒼と千晴は帰つて行つた。

一人が帰つた後の部屋は、静寂がいつもより強まつたよつて何か嫌
だつた。

数個の項目が書き込まれたノートを手に取り、目を通す。
既に一ページ目が埋まりそうな勢いだつた。

こんなに、自分に好みがあつたのかと思う。
そのノートをそつと閉じて、机上に置いた。
二人と接しているとき、感じたこと。
何度も、今まで感じたことがない感情だつた。

どう表現して良いか判らないが、ただこの時間が続けば良いとそう思つたのは確かだつた。

もっともっと自分ことを知つて、そして、そして。
少しでも良いから多く、自分という存在を認めてもらえたたら。

生温かい血液が、頬をつたつてゐる。
空から容赦ない雨が体を叩きつけ、寒さが肌に突き刺さるようだ。
何で自分はこんなことをしているんだろ？、そつと思つ。
自分だけじゃない。

他人たつて生きているだけ無駄なはずなのに無様に這い蹲つて、必
死に足搔いてゐる。

馬鹿らしい。

自分も回りも早く死ねば良いのに。
早く滅びれば良いのに。

体の力が抜け、目蓋が閉じかけた瞬間。

雨が、止んだ。

いや止んだのではない、自分のところだけ雨が避けてゐる。

「…大丈夫？」

傾けられた傘に柔らかい笑顔、優しい声。

不意に涙が零れそうになるかと思つほど油断してしまつた。

+ + + + +

「いつつん」

「…何？」

「ほんつとーに、黒好きだね」

つま先から頭まで全身真つ黒。
いや、真つ黒ではなくモノクロといつたのうだろ？。
千晴は感心したように頷いてゐる。

「だつて、落ち着くし」

「それで似合つてゐから問題ないか」

「んー」

ぱくり。

そもそも口を動かして食べているはクレープである。
今朝、何故だかしれないが千晴は学校をサボり、朝一に家を訪ねてきた。

それから拒否権なく、データしようと一言言われ、今に至る。
平日の真昼間からクレープを食べながら高校生男一人で公園のベンチに座っているなんて、端からどう見られているのだろうか。
兄弟か何かだろうか、どう思つ。

「ねえ、何で休んだの？」

「ああ、いつつんとの交友を深めよつと俺の独断で…」

そんなことで休んで良いものか、義務教育ではないのに。

「授業平氣?」

「うつ…そ、そんなに受けたも受けなへても一緒に、並んで寝るか
ら」

「胸張つて言つてじじょなこと思つよ

「…いつつん、並ぶようになつたね」

正論なので言ひ返すことも出来ない千晴。

以前逢つたときよりも、確實に良く喋るようになつてゐる。
だが、それはとても喜ばしことができると蒼が知つたら喜ぶだらう
なと思つた。

「俺が、やのうち学校行ってみよつと想つんだ」

「つむつ、本当かー?」

「あんまり行きたくないけど、ちょっとくらりに行つてみても、良いかなつて思つて」

「すげえ、すげえよこつて、よつしゃ頑張つくなーー。」

「このことを黒河樹の両親に告げたとき、思つた通りの反応が返つてきた。

そろそろ行つたほうが良いのではないかと彼等も想つていたのだろうが、氣を使って言い出せなかつたに違ひない。

そんな無駄な氣の使い方をしなくても良いのに。だから自分からそのことを切り出してきて、喜びとまさかそんなことがという驚きが同時に湧き上がつてきたのだらう。ただ、無理はしてないかと問われた。

「蒼にも言つとくよ、喜ぶぜ?」

「…あの方、訊いて良い?」

「おお、俺の答えられる範囲でなら幾らでも」

「あんたと蒼つて、どうこつきつかけで知り合つたの?」

その間に、千晴は笑みを絶やす。

しかしそれはほんの一瞬で、ただの見間違いかかもしれない。

「見てくれがこんなんだから、蒼と一緒にいるのは変つてことか」「変つていうか、どうやってそんなに仲良くなつたかって、思つた」「そうだな、知り合つまでは別世界の人間だつたし」

「…そんなに今とは違うの?」

「つん、随分丸くなつたつて言われる、自分でもつ想つし

とこつ」とせ、やはり蒼と出逢つて変わつたとこつとだらうか。

丁度、クレープを完食した。

これは結構好きかもしないと思つ。

「さうだな、」の話は今度にしよう、次にいつつんに逢つたときのお楽しみ、な」

「…あ、嫌なら話さなくとも良いんだけど」

「嫌じゃねーよ、俺に興味持つてくれてありがとよ」

それでも、話すことに抵抗があるのは確かなのだろう。昔の自分を思いだすことが苦なのかもしない。

田を細めて笑んだ千晴を見て、そう思つた。

+ + + + +

「ええーつ、ずる休みでしかもいつつんに逢いに行つてたのー!?」「ははっ、良いだろー」

帰宅直後、蒼から電話があつたと親に伝えられ、千晴は真っ先に蒼へと電話をかけた。

結局夕方まで外で過ごしてしまつていた。

今日のことを話すと、かなり非難される。

「こいつふんどじうだつた?」

「前より色んなこと喋つてくれたぜ、それと今度学校来るつて

「うそつー!ー」

「ほんと、楽しみだなー」

電話越しに聞こえてくる蒼は本当に嬉しそうだつた。
それを聞くと千晴も自然と笑顔になつてくる。

「いつくんとクレープ食つたんだけじゃ、あいつ甘い物はかなり好きかもだつて」

「アーニなんだ、じゃあ今度ケー キ買つてひたあがよつ
「アーニー」 ハペ 「イギー」

「うん、良いねっ！！」

あの日、蒼があそこに通りかからなかつたら、声をかけてくれなかつたら。

自分はここにいなし

こんなに楽しい毎日を送れていない。
朝には、本当に感謝している。

千晴は蒼と電話を通り会話を一

時は蒼と雷語を通して会話をしながら、心の中で感説した。

「樹、まじで覚えてねーの……？」

歪んだ表情で、訴えてきた。

ずきりと胸が痛む。

今朝とうとう決心を決めて登校してきたのだが、高校へ近くなつてくると、自身へ生徒達の視線が集中しているのに気づいた。事故に遭つた人間が登校してきたと生徒達はどこからか耳にしたのだろう。

野次馬と化した生徒達からの視線が痛い。

正直、誰一人として見覚えのある人間はいない。

同級生達もどう声をかけて良いのか判らず迷つていて、声をかけてくる者はいなかつたのだが、先ほど初めて声をかけられた。

彼は、黒河樹と良くつるんでいて仲が良かつたと言つ。

本当に記憶が失くなつていると本人から聞いて、動搖をかくせずにしている。

「つと…御免、名前何ていうの？」

「平澤、准だよ…」

駄目だ、やはり思い出せない。

どうしようかと焦つたのがわざとられたようで、准の瞳はかなりくすんだ。

これぐらいのことはあるだろと予測していたのに、やはり現実になるといつしょもなくなる。

「ははっ、そつか、でも良かつたよ退院出来たみたいで…」

ちつとも良かつた、とは感じていない瞳でそう言った。

今までの黒河樹を奪われたようで、手放しで喜べないのだらう。
きっと今までの黒河樹だったならば今の状況で、准に大歓迎され喜びのあまり抱締められていたらう。たゞ、事故に遭つて、無事退院し学校へ来れたのだからそれくらい当たり前だ。

「ねえ、ちょっとそこ邪魔だよ坊ちゃん達」

突然がしり、と頭に圧力がかかる。
ふわりと鼻孔を甘い香りがついた。

自分よりもずっと背が高く、整った顔立ちで少し長めの髪が目にかかるつている、制服からすると同じ高校の生徒。

随分と肝がすわっている、そんなふうに感じられる。

黒髪に金のメッシュと、そこから糸目がこぢらを覗いていた。

「朝から元気だね、若者」
「えつと…、どなたですか？」

若者とか表しているが、さほど変わらない年齢じゃないのか。
周囲と違つた雰囲気で少々浮いている人間だ。
思わず相手のペースにのまれそうになつてしまつ。

「あれつ、怜ちゃんがいつつんに絡んでる…？」
「おお、いつつん来てるじやん」
「おつはよう怜ちゃん、今日もいけいけだね…」
「おはよう、蒼じそ超ハイテンション、低血圧とは無縁そうで羨ましい」

一緒に登校してきたのだろう、蒼と千晴がいそそとひからへ向か

つてきた。

絡んできた怜という生徒と親しげである。

「…こつん、おはよー…」

「あっ、ああ…おはよー」

「来てくれて嬉しいよつ、ねえ千晴？」

「本当に、前よりももっと遊べんじやん」

不思議と、独りで登校していたときの嫌気が去つていつた気がした。肩に入つていた力が抜けて、安心出来たような、そんな感じ。かなり力んでいたのを自覚した。

「…こつんて、君がいつつんだったんだ、偶然」

「そうだよつて…怜ちゃん知らないで声かけたの？」

「そうじゃなくてさ、この人と何か道の真ん中で言い合つてたから仲立ちをしようど」

「言い合いつて…何か…あつたの？」

一度こつらのほうに視線を向けた後、准のほうを見る蒼。

大体何のことで言い合つていたのか予測がついたのだろうか、蒼は物悲しそうな表情になつた。

「…悪かった、じゃあ俺行くわ」

あ、と声が出かかった。

しかし。自分に引き止める権利などあるのだろうか。

彼と過ごした時間を全て忘れてしまつた彼の知つてゐる黒河樹ではない自分に。

去り際に、准が悔しそうな表情をしているのが見え、余計その気持ちは強くなつた。

「… そうだ、こいつん怜ちゃんと初対面だもんね、紹介しないと！」

「」

「ビーも羽柴怜ちゃんです、趣味は人間観察、スリーサイズはトップシークレットで、因みに彼女は年中無休で募集中、これを機会に俺と付き合おつか？」

「つ…？」

「怜ー、こいつん怯えてるよー」

「怜ちゃん[冗談は大概にしないと、こいつんに[冗談は通じないんだから」

何だ[冗談か。

それをしつて胸を撫で下ろす。

「[冗談じゃない]と言つた[冗談]ある？」

「これ以上付き合つのは時間の無駄だから放置する」

「…御免、蒼、[冗談だから放置しないで」

蒼も千晴も個性的だが、怜はそれを更に上回つてている。

随分と変わり者なんだなあと蒼と夫婦漫才を繰り広げている怜を見てそう思った。

「このまえバイトで来れなかつたつて言つてたのが怜ちゃんなんだよ」

「ああ、あのときは残念だつたな…でもこじで出逢つたが運命だ、俺達は赤い糸でむすば…」

「よーつし、それじゃあ皆で一緒に登校しようかつー…」

「怜、お前つて本当何がしたいんだか判らねーよ…」

「うん、俺も判らない」

蒼に腕を引かれ、ただ足を動かしながらも思つ。

先ほどの准の驚いた顔が脳内をちらついて、素直に前を向けない。こうやって腕を引いてくれる人がいなければ、今この場から逃げ出していくだろうと。

高校にすらついていない、今日はまだ始まつたばかりなのだ。

「桜ちゃん今日も可愛いね」

「あからさまな棒読みでよくも抜け抜けと言えたもんだな、羽柴」

「冗談じゃないよ、名前が可愛いってことだから」

「お前やっぱ一回死ねよ」

「死ぬなら好物の苺に溺れて死にたいなあ、コンデンスマルクたつ
ぶりで」

何だろ？、この会話。

蒼と千晴は6組で怜が1組、そして自分が2組と蒼と千晴とは教室
が結構離れており、先ほどまた後でと残し、別れた。

怜とは教室が隣同士なので、何かあつたら怜に助けを求めるように
言われる。

それで怜が人を紹介したいということで今この状況にあるわけだが。
その紹介したい人というのは自分と同じクラスの女子生徒だった。
会話を聞いている限りかなり親しいというか、互いをよく知り合っ
ている、そんな感じがする。

「そういうことで二つんを宣しく」

「何がそういうことだか説明しろ、超能力者じゃないんだぞあたし
は」

「…桜の中に話しかけたら快く引き受けてくれたよ？」

「それはお前の勝手な妄想だ」

「冗談だよ冗談」

「お前が言つと全部本気に聞こえるから止めろ」

絶え間なく続いた会話に疲れ、桜という生徒は溜息をつき、じりじり
に視線を移してきた。

じつと見つめられ、その視線に体がびくつとする。

怜との会話を聞くに、彼女はかなりさばさばしている性格のようだつた。

目力が少し強い所為できつめの印象を思わせる。ショートヘアで全体的にさっぱりとした外見だ。

「黒河、あたしのこと覚えてる?」

「えつ…」、「御免、覚えてない…」

「…くえーやは記憶喪失つて本当だつたんだ、初めて見た」

同じクラスなのだから、黒河樹のことを知つていて当たり前だ。先ほどの准のことがけりつつき、身構える状態になる。

「あたし相沢桜、羽柴と小学校からの腐れ縁つてやつなんだ」

「へえ…だからそんなに仲良いのか…」

「仲が良いとかそんなんじゃないって、こいつが生意氣だから…」

「生意氣なのはどつちだよ」

今にも殴りかかりそうな視線で怜を睨む桜。

自分がいなかつたらきっと容赦なく殴つているのだろうなと思つ。

「俺隣の教室にいるけど、移動教室とかのときは桜に訊いた方が早いかなって思つて、いつつんが何かあつたら頼むよ」

「判つた、今度昼飯奢りなー」

「了解、じゃいつんそつこつことだから、また後でな」

ぐしゃぐしゃと頭を撫でられる。

同年代の男にこんなことをされるなんて思つてもみなかつた。

その行為に対しても不機嫌な表情をすると、怜は笑つて自分の教室へ向かつていつた。

「そうだなあ黒河、ちょっと話聞きたい、良い?」

「…うん、良いけど」

「おお、あんがとー」

桜に促され、教室へ足を踏み入れる。
教室前で怜と桜と話していたときから感じていたが、教室内の生徒
達から視線が集中している。

言つてしまえば登校中からずっと見られているようだが。

「あんたの席はここだよ、あたしは廊下側の一一番前ね」

窓側の後ろから一一番前。

そこが黒河樹が使っていた席だといつ。

自分の席だと言われても、この学校に来たこと自体が初めてとしか
感じられない自身にとつてはしつくつ」ない。

「本つ当に何も覚えてないの?」

「うん、御免、何も覚えてない」

「あ、謝らなくて良いって、別にあんたが悪い訳じゃないんだから
さ」

そう言われて、自分が知らずの内に謝つていることに気づく。
記憶を忘れてしまつた、ということは自分が悪いのか。

別に自分が悪い訳ではないじゃないか。

「…苦しい顔してどした?」

「つ、何でもない…」

「うーん、じゃあそー、羽柴とはどんな風に知り合つたの?」

「加富蒼つて奴の、知り合つたから」

「ああ、蒼の一、つて蒼とはどうやつて？」

突然声をかけられた。

そう答えると、桜は顔をしかめた。

そして、何かを懐かしむように笑う。

「…はつ、あこつらしこつちやあこつらしこね」

「あいつ知ってるの？」

「まあね、蒼とは中学校から一緒に、ほんつヒーに面白い奴だよな」

「…うん」

面白い、といふか変、だなあと思つた。

こんなこと直接本人には言えないが、正直な感想はこいつだ。

「…」

「…つ、何？」

「あ、いや、綺麗に笑うんだなーって思つたの」

「笑う…？」

「色々悩んでるみたいだから笑う」とすら聞々ならなにのかと思つたけど、そんなことなくて、良かつたよ」

意識していなかつた。

知らぬ内にこぼれていたのだろうか、笑うなんじこと出来るはずがなかつたのに。

いつの間にか、自然と出来るよつになつていていたりしい。

「あたしに出来る」とがつたら何でも言えよ

それに対し、有難うと、無意識の笑顔で返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1238d/>

Cocktail

2010年10月17日03時06分発行